



虹のかけ橋

* * * * * 第30号/平成22年7月

兵庫県立 但馬やまびこの郷

<http://www.t-yamabiko.asago.hyogo.jp/>

「体験」を学校復帰の力に

但馬やまびこの郷は、4泊5日以内の宿泊体験を通して、不登校児童生徒の学校復帰を支援しています。

料理、サイクリング、製作、スポーツなど、さまざまな活動を行います。活動を通じて、同年代の子とのかかわりをもったり、物事にチャレンジする意欲を高めたり、自信を取り戻したりすることができます。



調理（蒸しそぎょうざ）



座禅体験



千ヶ峰登山



製作（切り絵）

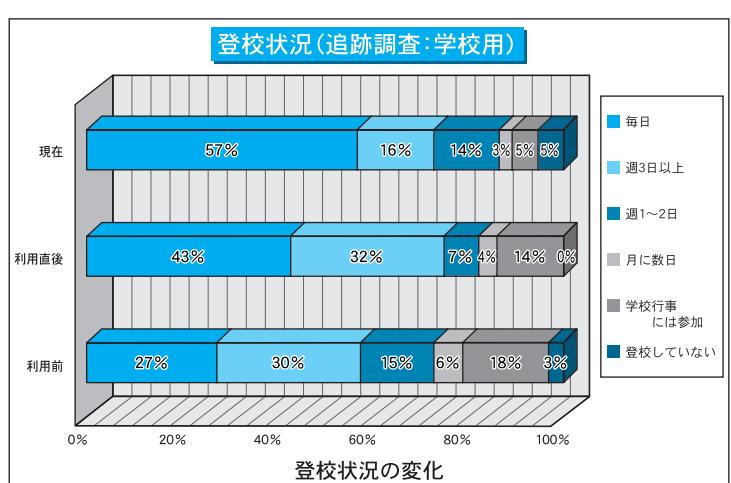


田植え体験

平成21年度は、のべ306名の児童生徒が当所を利用し、様々な活動や同年代の子とのかかわりを通して、元気を取り戻し、次の一步へ踏み出していました。

右の表は、昨年度の利用者に対して行ったアンケートのうち、登校の状況が、当所の利用前、利用直後、現在でどのように変化しているかを示したものです。多くの子どもたちが、当所の利用後に、学校復帰に向けて動き始めていることが分かります。

学校復帰へのステップとして、当所の宿泊体験活動をご活用ください。



不登校を未然に防ぐ 開発的・予防的アプローチについて（その1）

関西学院大学 准教授 中村 豊



はじめに

文部科学省の「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」（平成20年度）結果によると、不登校の総数は微減しています（図1）。他方、暴力行為については、3年連続上昇しており更新中です（図2）。一見、現れ方が異なるように見える非社会的（不登校）と反社会的（暴力行為）問題行動ですが、根本は学校教育への不適応であると見立てることができます。そこで、新たに不適応に陥る児童生徒を出さないという視点から、生徒指導における開発的・予防的アプローチについて述べていきます。

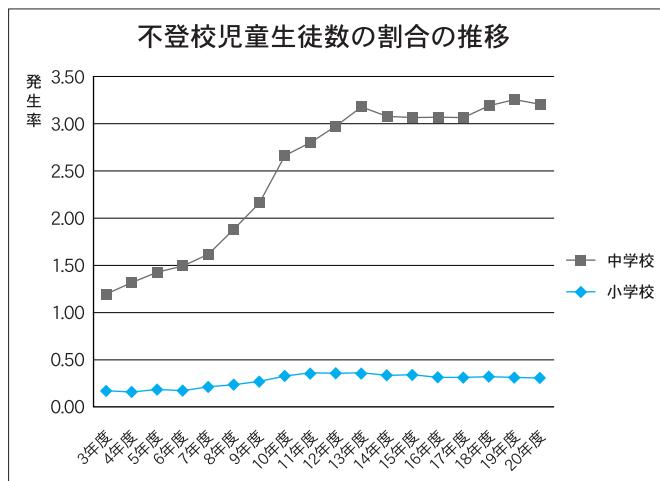


図1（※欠席日数が30日以上となってからの推移）

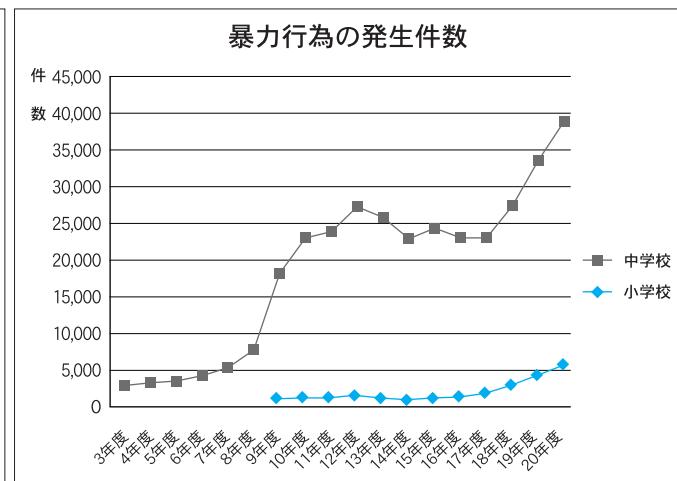


図2（※小学校が調査対象となったのは平成9年以降）

1 不登校対応の現状と課題

不登校対応として期待されているスクールカウンセラー制度は、全国154校において平成7年より始まりました。心の専門家であるスクールカウンセラーを制度化して学校に配置することで、悩みを抱える子どもたちへの対応の一層の充実を図ってきました。

しかし、不登校児童生徒数が横ばい状態であることからも、学校生活に不適応症状を示し始める前に、未然防止の観点からの取組が必要と考えられます。

図3は、学年別不登校児童生徒数を表しています。グラフから分かるように中学校進学後に不登校数が飛躍的に増加しています（中1ギャップ）。また、不登校に近い状態にある「グレーゾーン」（予備軍）の児童生徒の潜在数も見落としてはならないと考えています。

ゆえに、教育の専門家である教師には、新たな不登校を生まない生徒指導を行っていくことが喫緊の課題として求められているのです。

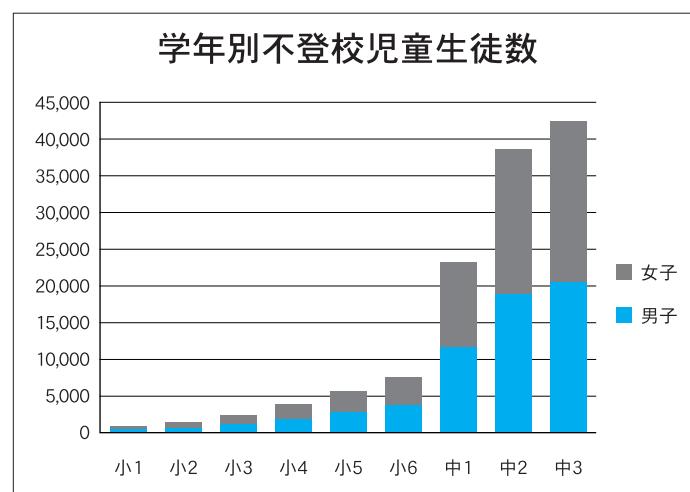


図3（※平成20年度の国公私立学校合計値）

2 開発的・予防的アプローチとは何か

教育相談（学校カウンセリング）の知見を生かした「積極的な生徒指導」として、開発的アプローチでは、児童生徒の精神的健康の増進と居場所のある学級づくり等を、予防的アプローチでは、不適応手前の児童生徒の早期支援に寄与する学習場面等を、意図的計画的に設けていくことである。

開発的・予防的アプローチの一つに社会性を育てるための社会的スキル教育があります。社会的スキルとは、対人関係を円滑に運ぶための具体的な技能を総称したもので、スキル教育とは、基本的な対人関係スキルと発達段階に応じた社会的スキルを身につけさせる学習活動です。

生徒指導というと、何らかの問題行動を起こした児童生徒に対する個別指導がイメージされます。しかしながら、本来の生徒指導とは、個々のよさを伸ばし、社会的な資質を身につけさせていくことにあり、スキル教育はそれをめざした取組なのです。

学級集団を対象とした授業をすることで、回避・予防できる問題（不登校・いじめ・学級崩壊・暴力行為等）があるという前提に立ち、児童生徒の社会性を育てるためのアプローチをしていくことに開発的・予防的という特色を見いだすことができます。

3 開発的・予防的アプローチの有効性

今後学校では、教科指導と同様に生徒指導を充実させることができます大切になります。そのため、開発的・予防的アプローチによる生徒指導を授業の中に位置付けることが必要であり、社会的スキル教育は、その時間と場を教育課程内において保証していくものです。

筆者が勤務していたY中学校では、生徒指導上の課題に対して、社会性を育てるためのスキル教育の授業を実践していました。同様な実践（〇〇プログラム、ピアサポート、アサーション、人間関係づくり、等）が各地で取り組まれていますが、そこでは、生徒の社会的資質の伸長に寄与するという報告が多数されています。

学校は「公」の場であり、社会への橋渡しの場です。児童生徒たちに最低限度の社会的スキルを身に付けさせていくことは極めて重要なことです。

これからの中学校教育では、「社会性の涵養」が課題だと指摘されていますが、不登校を未然に防ぐ一助として、開発的・予防的アプローチは、教育的（育てる）カウンセリングとしても有効な手立てであると考えられています。〈次号に続く〉



【筆者プロフィール】

埼玉県内の公立小学校、公立中学校での教職経験を持つ。その間、教育相談主任や適応指導教室の相談員として、教育相談活動を続ける。また、埼玉県教育心理・教育相談研究会の専門委員長を務める中で、児童生徒の社会性を育てるためのスキル教育のカリキュラム作成と授業の教材開発を行う。中学校を退職後、関西学院大学文学部に勤務。専門は、臨床教育、生徒指導、教育相談等。

利用者アンケートの結果から考える

昨年度、但馬やまびこの郷サテライト事業として、学校復帰や進路を見据えた支援の在り方に関する取組について調査研究を行うため、これまでに当所を利用した1,171の方に、アンケートの協力を依頼し、211の方から回答をお寄せいただきました。ここでは、その一部をご紹介し、不登校対策における視点をお示ししたいと思います。

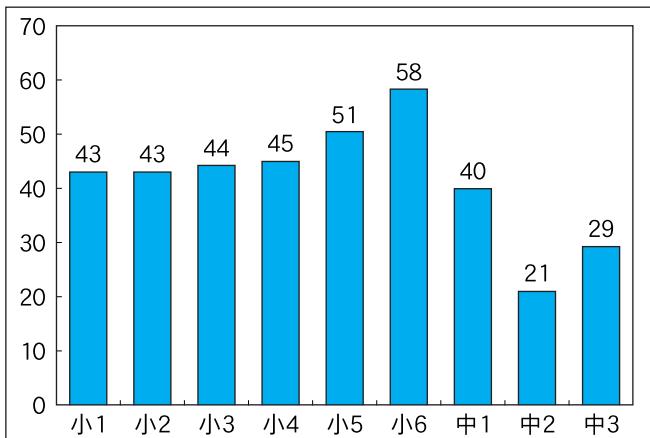


図1 「少し休んだ」学年別状況

1 各学年の出席状況

図1は、小・中学校における各学年の出席状況について、「少し休んだ」という回答数を示していますが、約1/4～1/5の子が、小学校段階で休み始めていることが分かります。

この少し休み始めた時期に、未然防止の観点からアプローチすることができれば、不登校はもっと減らすことができるはずです。

気になる様子が見られたら、意識して言葉をかけたり、家庭と密に連絡をとったりするなど、早期対応を心がけたいものです。

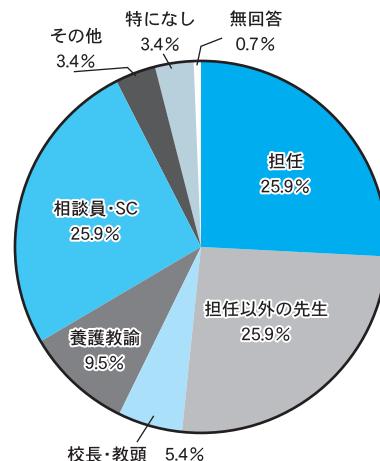


図2 登校できなかった時に誰に相談したか

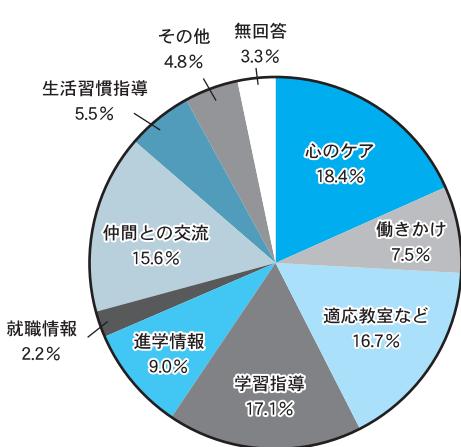


図3 登校できなかった時に必要とした支援

3 登校できなかった時期に必要とした支援

最も多いのは、やはりカウンセリングや相談を通した「心のケア」でした。じっくり聞き、そして一緒に考える姿勢を示すことが重要です。

また、「学習指導」を望んでいる子も多くいます。休むことでさらに学習が遅れ、自力では解決できずに苦しんでいるのです。学校からの支援を子どもたちは待っています。

「適応教室などの関係機関」「仲間との交流」を望む声が次に続きます。人間関係づくりや体験を通して自信の回復など、但馬やまびこの郷もそうした子どもたちの要望に応える施設であると考えています。学校復帰のステップとして、当所をご活用ください。